



知っておきたい

# 松江市名誉市民



名誉市民章

松江市では、市民又は本市において縁故の深い方で、公共の福祉の増進や文化の進展に寄与した方を「松江市名誉市民」とし、その功績を称えています。現在24名の方にこの称号が贈られています。シリーズで1名ずつ紹介していきます。郷土の誇りとして、いつまでも私たちの心に刻んでいきたいですね。

こ い ず み や く も

## 第8回 小泉 八雲 氏 【1850~1904】(昭和33年5月3日 顕彰)



写真：『松江市勢要覧』より転載

ギリシャのレフカダ島に生まれる。本名パトリック・ラフカディオ・ハーン。幼少期は、大叔母サラ・ブレナンに育てられ、イギリス、ダーラム市郊外の聖カサート校に入学した。16歳の時、遊戯中の事故により左眼を失明。その後、大叔母破産のため学校を退学、昔の使用人を頼りロンドンへ行ったが貧困な生活を送った。

19歳でアメリカに渡り、シンシナティの新聞記者となり、また、フランス文学を翻訳し紹介した。24歳の時、黒人女性と結婚するがさまざまな困難があり破局。その後、ニューオーリンズに移り記者として活躍、地域固有のクレオール文化を紹介した。

その後、仏領西インド諸島のマルティニーク島の取材を終え、明治23年4月来日、同年8月島根県尋常中学校及び尋常師範学校の英語教師として松江に迎えられた。山陰の民俗風物取材し、著書『知られぬ日本の面影』により松江を世界に紹介した。

滞在中、小泉セツと結婚。明治29年に帰化し「小泉八雲」と改名した。松江を後にしたハーンは熊本第五高等学校に赴任、3年後、神戸クロニクル社に転職した。明治29年、東京帝国大学講師となり、同37年、早稲田大学講師として招かれたが、この年、心臓発作のため逝去した。

八雲の残した作品は、『怪談』をはじめとする伝承や再話文学など、今も多くの読者に親しまれている。

### 八雲ゆかりの人物

八雲の妻

#### 小泉 セツ

松江の南田町に生まれる。八雲の身の回りの世話をする仕事を通して出会い、やがて夫婦となる。『怪談』等執筆の協力者として大きな存在であった。

1868年2月4日～1932年2月18日



写真：小泉家所蔵

八雲の教え子にして助手

#### 大谷 正信

松江の末次本町に生まれる。俳人・英文学者。松江中学、帝国大学の両方で八雲に学んだ。松江では虫や日本の珍しい楽器を紹介し、大学では日本研究の助手として資料を集めるなど、八雲の作品制作に協力した。

1875年3月22日～1933年11月17日



写真：小泉家所蔵

最も信頼された友人

#### 西田 千太郎

松江の雑賀町に生まれる。松江中学校教諭。公私にわたって八雲の日本での暮らしを支えた。優れた教育者として生徒にも慕われた。

1862年9月18日～1897年3月15日



写真：小泉家所蔵

八雲の作品のモデルとなった友

#### 雨森 信成

福井藩士の子に生まれる。外国語を学んだ後、欧州を旅し、西洋文明を体験する。八雲の理解者であり、執筆の協力者。『心』所収「ある保守主義者」のモデルとなった。

1858年3月15日～1906年3月1日



写真：小泉家所蔵

CHIDORI No.107

松江市立図書館報

編集・発行／松江市立中央図書館  
〒690-0017 松江市西津田六丁目5-44

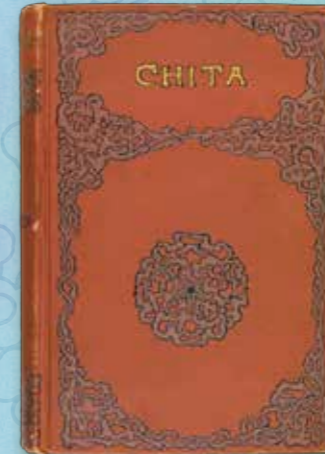
☎(0852)27-3220

2020年 9月発行

https://www.lib-citymatsue.jp/  
E-mail: chuou@lib-citymatsue.jp



『飛花落葉集』1884年出版



『チータ』1889年出版



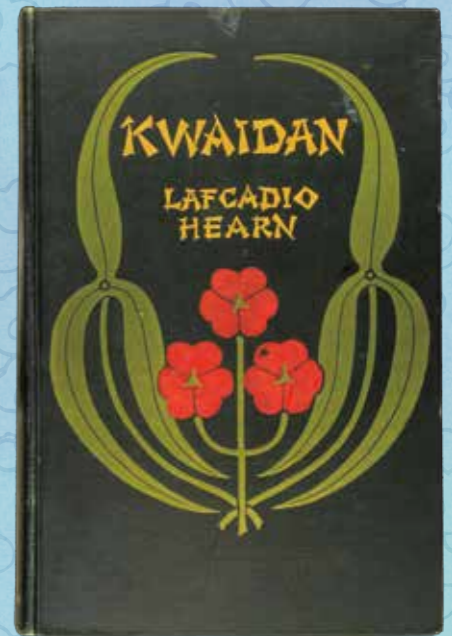
『知られぬ日本の面影』1894年出版



『心』1896年出版



『日本雑記』1901年出版



『怪談』1904年出版

## 小泉八雲の著作(一部)

クイズ

それぞれ八雲が何歳の時に出版した本でしょうか？  
※見開きを見て答えを探してみよう！

初版本表紙：松江市立図書館蔵

### 内容

- 表紙 小泉八雲の著作(一部)
- 見開き 遊んで・学べる小泉八雲の生涯
- 裏表紙 郷土の葉 松江市名誉市民シリーズ「小泉 八雲 氏」  
八雲ゆかりの人物

せいたん 170ねん  
らいにち 1910ねん  
らいにち 1910ねん  
130ねんきねん

遊べる  
学べる

ラフカディオ・ハーン  
しょうがい  
小泉八雲の生涯



ニューオーリンズ時代のハーン  
写真:小泉家所蔵

小泉八雲の生涯を楽しく学べるすごろくです。  
子どもの頃から亡くなるまで、色々な国や日本各地  
で何を見て何を思ったのか小泉八雲になったつもり  
でゴールを目指しましょう!

- 用意するもの
- サイコロ
  - 人数分のコマ
  - 知りたい!というワクワクする気持ち

**スタート**  
1850年6月27日  
ギリシャのレフカダ島で生まれる  
父はイギリス人・母はギリシャ人  
その後、父の実家のあるアイルランドに引越しをする

4歳  
ハーンを残して母親がギリシャへ帰る

7歳  
ハーンを残して父親がインドへ行く

16歳  
遊んでいる時にロープの結び目が左眼に当たり失明する  
1回休み

19歳  
アメリカへ渡り、シンシナティでジャーナリストとして過ごす  
殺人事件を書いた記事が注目され、名をあげる  
1コマ進む

24歳  
当時の法律で禁止されていた黒人と結婚するが、2年後に別れる

27歳  
ニューオーリンズに引越しをする  
クレオール文化に惹かれる

29歳  
食堂「不景気屋」をオープン  
仲間に裏切られ20日間で閉店  
1コマもどる

31歳  
新聞社の文芸部長となり、好きなテーマで記事を書けるようになる  
1コマ進む

34歳  
初めての本『飛花落葉集』を出版

35歳  
博覧会で日本の展示品を見て心惹かれる

37歳  
取材のため、インド諸島に渡り2年間過ごす  
1回休み

39歳  
『チータ』出版  
ハーン初の小説

43歳  
長男、一雄が生まれる  
その後53歳までに、男の子2人と女の子1人が生まれる

43歳  
セツの妊娠を知り、帰化(日本人になること)について考え始める  
1コマ進む

41歳  
約200人に見送られセツの家族とともに出発する

11月  
コレラが流行し、学校が休校となる  
1回休み

10月  
熊本の第五高等中学校への転任が決まり、送別会が開かれ、別れの品として日本刀や花瓶を受け取る

8月  
セツと伯耆方面へ旅行する  
楽しみにしていた盆踊りが中止と知る  
1コマもどる

5月  
普門院で「小豆磨ぎ橋」や「水飴を買う女」などの怪談話を聞く

4月  
大橋開通式を自宅の二階から見る

1月  
寒さのために病気になる  
看病と身の回りの世話をしてくれたセツと親しくなる

12月  
印鑑に興味をもち、自分の「へるん」の印鑑を作る

9月  
出雲大社を訪れる  
外国人で初めて中の見学を許される  
1コマ進む

8月  
8月30日松江に着  
尋常中学校の教頭、西田千太郎と親しくなる

40歳  
日本へ渡り、横浜・鎌倉などを見学する  
松江で英語教師として働くことが決まり出発

44歳  
日本に来た時の印象を書いた『知られぬ日本の面影』を出版

44歳  
新聞記者として神戸へ引越しをする

45歳  
作家として生きていくことを決め、新聞記者を辞める  
1コマ進む

46歳  
日本へ帰化が認められる  
名前を「小泉八雲」に変え、これまで共に過ごしてきたセツと本当の夫婦となる  
名前の由来は『古事記』の和歌にちなむ

46歳  
日本人の精神・勇気・感情などを書いた『心』を出版

46歳  
家族とともに美保関や出雲大社へ旅行する

46歳  
帝国大学(今の東京大学)の講師として東京へ引越しをする

47歳  
親友である西田千太郎が病気のため亡くなる  
1コマもどる

47歳  
静岡の焼津へ家族を訪れ、海水浴を楽しむ  
そこで出会った山口乙吉の人柄と焼津の海を気に入り、毎年のように訪れる  
1コマ進む

51歳  
八雲の得意とするジャンルをまとめた『日本雑記』を出版

53歳  
生徒たちから大学に残ってほしいという声もあったが、大学を辞めさせられる



成人した子供たち  
写真:小泉家所蔵

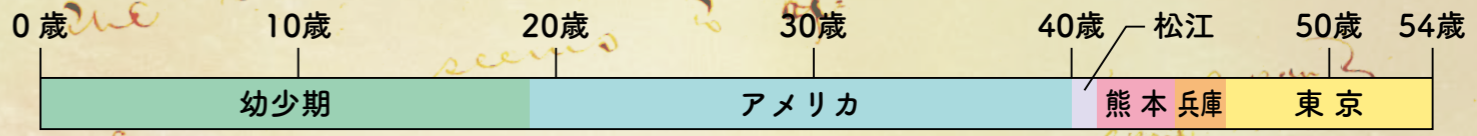
- 参考資料
- 小泉八雲事典(恒文社)
  - 文学アルバム 小泉八雲(小泉時・小泉凡 共編・恒文社)
  - 小泉八雲・松江(小泉凡 監修・(社)松江観光協会)
  - 小泉八雲展(県立神奈川近代文学館・財団法人神奈川文化振興会)
  - 松江の俳人・大谷繞石(日野雅之 著・今井出版)
  - 心 個人完訳 小泉八雲コレクション(小泉八雲 著・平川祐弘 訳・河出書房新社)



八雲が描いた焼津海岸の風景(1900年)  
絵:『RE-ECHO』小泉一雄著より転載

**ゴール**  
54歳  
「耳なし芳一」や「雪おんな」などの名作を集めた代表作の一つである『怪談』を出版  
1904年9月26日、セツに看取られて心臓発作で亡くなる

54歳  
早稲田大学に講師として招かれる



ご協力いただいた方々 小泉家/小泉八雲記念館/八雲会